



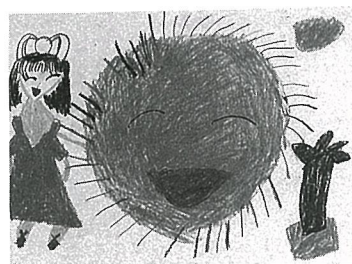
4年 鵜沢千尋さん



※左右の右の字がむずかしかった。名前がよく書けたと思います。



1年 こしかわ りささん



『たいようとわたし』

※たいようとわたしは、とてもなかよしです。いつもけんがいっぱいです。



あつまれみんなの力作



5年 行方 瞳さん

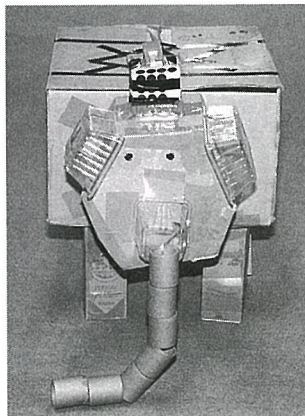


五年 行方 瞳

※花という字の三つの左はらいに気をつけて元気がいっぱい書きました。



2年 森 淳平くん



『ぞうの親子』

※赤ちゃんぞつが、お母さんの頭からおちないようにへやを作つてあげました。



6年 古西美幸さん



古西美幸

※夢という字は一字なのでバランスをとるのが、むずかしかったです。

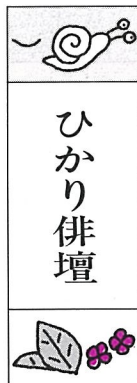


3年 伊藤実希さん



小三 伊藤実希

※「川」という字のはらいに気をつけて、大きく元気に書きました。



布施 和代(二又)
絵馬札の上に絵馬札風薫る

祈願を籠めて奉納された絵馬札の層を、神苑を渡るみどりの風が優しく触れてゆく。

大谷 武彦(木戸)
廃船の傾ぐ渚や春暮るる

暮れ行く春の渚に廃船として身を曝す船、現代の世相を表徴するかのようでもある。

布施喜美雄(二又)
初蝶の地面三尺舞ひどころ

羽化して間もない蝶であるう、灌木の中を縫うように飛んでいる。中七以下軽妙。

秋山 一泉(栢田)
行く春や七十路終の旅となり

大木 素風(二又)
行く春や山肌ゆらし重機音

川島 通則(二又)
春昼や妻の欠伸につられけり

土屋 義昭(虫生)
行く春の風の囁き野に聞けり

短評 椎名しげる

評者吟
白きものばかりが干され春の果